

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第680号 平成26年1月30日

何と面妖な

我々は何故、かくも愚かなリーダーを持たなければならないのだろうか？

靱井NHK新会長の発言を聞いて、暗澹たる思いを禁じ得ません。そして、問題発言をした当人を弁護する菅官房長官の理屈もまた、誠に面妖で、理解に苦しみます。

靱井新会長の発言は、1月25日に行われた会長就任記者会見で飛び出したものです。新聞報道等を総合すると、慰安婦について「今のモラルでは悪いんですよ」としつつ「戦争をしているどこの国にもあった」としてフランスやドイツの名を挙げると共に、「何故オランダにまだ飾り窓があるんですか」と述べ、更に、政府が「右」としているのに我々が「左」という訳にはいかないと述べた様です。

こうした靱井新会長の発言に対して、国内外から厳しい非難の声が上がっているのは、至極当然の事といえるでしょう。

靱井新会長は、「就任の記者会見という場で私的な発言をしたのは間違いだった。私の不徳の致すところですよ。不適當だったと思う（1月27日付朝日新聞他）」と述べています。

公的な記者会見の場で私的な発言をするという事自体如何なものかと思えます。しかし、今回の問題の本質はその様なところにある訳ではなく、記者会見の場で、従軍慰安婦問題にオランダの飾り窓を引き合いに出し、政府が右といえれば右といって憚らない、その不見識こそが問われているのだという事を、自覚すべきです。

幾ら個人的見解という前提を付けたとしても、会長就任の記者会見で発言すればどう扱われるかは容易に想像が付く筈です。靱井新会長にはそうした想像力が欠けていたのかも知れませんが、その様な人物がNHKの会長である事は滑稽ですらあります。

橋下大阪市長が「発言は問題ない。僕と全く同じ。まさに正論」と述べているのは論外としても、菅官房長官が「個人としての発言で問題ない」と擁護しているのは、驚くばかりです。

靱井新会長は、NHKのトップであって政府のスポークスマンではありません。彼が、今後ともマスコミ界に身を置こうとするのであれば、「政府が右というものを左とはいえない」という発想は、致命的といわざるを得ません。

もしも、靱井新会長の認識が「NHKは政府の代弁者」というのであれば、そうした認識はNHKの存在理由をも揺るがす大きな問題となるでしょう。

また、従軍慰安婦は旧日本軍だけの問題ではなかったかも知れませんが、しかし、いかなる理由があるにせよ、今日においてそれを容認するがごとき発言は、許されません。にもかかわらず、靱井新会長が、オランダの飾り窓を引き合いに出したという事は、従軍慰安婦に対しても肯定的な認識を持っている様に、聞く者には感じさせます。

菅官房長官が、靱井会長の発言を個人の見解として擁護したという事は、靱井会長の発言を政府は容認するというメッセージを示した事にもなる訳で、政府は外国からの批判を覚悟しなければなりません。

個人として、どんな思想や歴史観を持っていようとそれは自由ですが、社会的な地位が高くなればなる程、その発言には慎重さが求められます。例え個人的とはいえ、自分の発言の波紋や影響を想像し得ないのなら、公職を離れて自由に発言すべきで、NHKの会長という重職に就くべきではないと思います。

私も、日々の仕事の中で、本音と建前が交錯する事はままあります。しかし、もし私が、障がい者の差別を容認する発言をしたら、「それは飽く迄個人的な見解」といい繕ってみても決して許される筈はありません。本音でそう思うなら、社会福祉法人の責任者に止まるべきではないという事です。それが、社会福祉法人の責任者としての私の矜持です。

NHK新会長として、靱井氏の矜持は那邊にあるのか見せていただきたいものです。(塾頭：吉田 洋一)